

「異常値の出るメカニズム」第4版

河合 忠
屋形 稔 編集
伊藤 喜久

慶応義塾大学医学部中央臨床検査部

渡 辺 清 明

本書は第1版が1984年に出版され、以来25年間にわたり臨床検査の基礎読本として多くの医師や技師に愛用されてきた。

今回第4版が出版され、内容も感染症をはじめ最新の事象が加わり、前回の第3版より約60頁ほど増頁され、ますますブラッシュアップされた。具体的にはベンス・ジョーンズ蛋白、リンパ球表面マーカー、トロンビン時間、血清マグネシウム、ナトリウム利尿ペプチド、免疫グロブリン、補体、甲状腺自己抗体、感染症関連検査、エンドトキシン、HTLV-Iなどが新たに加えられた主な項目である。これらの最新の項目の追加により旧第3版に比し、かなり刷新されたものになっている。

この本の特徴は、基本的な臨床検査について、どのような病態あるいは疾患で異常になるかをひとつひとつの検査について極めて明解に解説してあることである。医療の現場では、患者を診察し現症をみて確診に至るが、その際スクリーニング検査を行うことは診断に必須となっている。したがって、スクリーニングに用いる尿や血液検査の値を確実に読

むことは非常に重要である。

つまり基本検査値をいかに判読し、次の確定診断につなげるかは、疾患の診断や治療判定に不可欠なものである。まして、最近では医療経済の問題(検査の包括化)やリスクマネージメントの問題から、効率的で確実な臨床検査を行うことがあらゆる方面から要求されており、この点はクリアすべき最重要課題の1つになっている。

最近では多くの臨床検査が利用できるようになったが、その反面ひとつひとつの臨床検査の適応や解釈について十分理解されなくなったように思う。したがって、決して有効でない検査計画が立てられ、むだな検査依頼がなされる危険性が出てきている。このことは今始まったことではないが、今まさに臨床検査の基本的な使い方の十分な理解が必要な時代となっている。

本書を読めば、初期診療や再診時にどのように臨床検査を解釈すれば、医学的にもまた医療経済的にも無駄のない効率の良い臨床検査の使い方ができるかを容易に把握できる。

また、最近医療には Evidence-based Medicine (EBM) が大切とされている。臨床検査は客観的数値を医師に与えるため、患者病態を捕らえる恰好な evidence となっている。しかし、いくら素晴らしい evidence があっても、その読みが甘ければ大した evidence にはならない。そこで、“臨床検査で異常値の出るメカニズム”をよく知り、診断のために確実に検査値を利用することが求められている。そういう意味でぜひ本書を一読されることをお勧めする。なぜなら臨床検査の本は多くあるが、異常値の出る機序を掘り下げて重点的に記載してある本は非常に少ないからである。

このような臨床検査の基本知識は医学生のみならず、研修医、一般実地医家など実践で活躍する医師に不可欠であるので、本書を生涯教育の伴侶として利用すれば大変有益と思う。

● B5 頁416 図286 写真9
カラー写真39 表218 2001
定価(本体5,800円+税) 送料実費

医学書院 刊(☎03-3817-5657)